



ゆききふさんぽうはつあつるる
「雪消山峰露」

筆 大徳寺興臨院

山口萬拙和尚 (大正三年〜昭和六十年)

實相寺 花園会報

平成三十年
二月一日発行
発行所

臨濟宗妙心寺派
陽明山 實相寺
實相寺花園会

〒761-0450

高松市三谷町
1811番地1

TEL087-889-3838

編集発行人
山本文匡

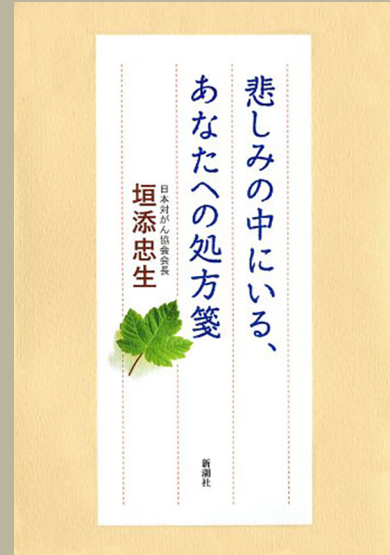
<http://www.jissouji.net>

第107号

今年の冬は各地で大雪となり、様々な被害が出ていますが、一昨年は北関東で冬に降雪が少なく、利根川水系では夏に水不足となりました。こうしてみると、私達の生活は本当に微妙な自然のバランスで成り立っていることが判ります。雪もよし、雨もよし、晴れも曇りも、どれ一つとして要らないものではありません。良し悪しは自分の都合です。

おすすめの本

先日、愛知県一宮市の総合大雄会病院で、長らく看護師として病院や介護老人保健施設に務められ、その後、日蓮宗の尼僧となって地域のビハーラ活動に取り組まれている、林妙和師のお話を聴く機会がありました。その時に教えて頂いた本ですが、とても読みやすく、また全ての人に有益な本だと思いますのでご紹介致します。



著者の垣添忠生氏は医師であり、ご自身の奥様を亡くされた経験を『妻を看取る日 国立がんセンター名誉総長の喪失と再生の記録』というタイトルで二〇〇九年に新潮社から出版されています。この本はその続編で新潮社から二〇一一年に発行されていますが、ご自身の経験を踏まえ、家族や自身の死別をどう受けとめれば良いか、その手掛かりが医学的な見地から述べられています。また昨年亡くなった日野原重明先生等との対談も収録されるなど、充実した内容となっています。

と、ここまで書いてきて、既にこの本が絶版になっていることを知りましたが、県立図書館に蔵書が二冊あります。電子書籍ならばアマゾンで購入可能です。

随処ずいしょに主しゅと作るな

平成30年度の花園会教化推進テーマは、
「おかげさまの心」

「いつでもどこでも仏さま 随処ずいしょ作主しゅ」
です。

今年は久しぶりに本山より布教師に任命され、来月は愛媛県南予地方を巡教することになりました。そこで年度テーマについてご紹介したいと思います。

テーマの元となる「随処作主」は臨濟禅師の言葉です。『臨濟録』には「仏道修行に特別な功德は必要ない、ただ腹が減ったら食事をし、眠くなったら横になるような日常生活を、平常無事びんじょうむじに行うことこそが大切である」と説かれ、「安心を自らの外に求めることが迷いの原因であり、

随処に主と作れば、立処皆な真なり」と説かれています。

では随処に主と作るとは、どういう意味でしょうか？一般的には「どのような状況でも主体的に生きるならば、その場その場が真実である」と解されます。

主体的を辞書で調べると「自分の意志・判断に基づいて行動するさま」とあるので、ともすると「自我を確立し、他者とは異なる自分らしさを発揮すること」と受けとめられますが、臨濟禅師が説く「随処作主」は必ずしもそうした意味ではありません。元妙心寺管長の山田無文老師は次のように仰っています。

「ごつかすると、威張ることだととられるけれども、そうじゃない。主といふこ

とは威張ることではない。自我があつてはいかん。自我のない透明な心、それは自分と他人の区別のない心である」と。
古来「自在じざい」という道具があります。
自在は床の間に掛け軸を飾ったり、囲炉裏に鍋を掛けたりする際、その高さを調整する為の道具です。

例えば、床の間の主役は掛け軸ですが、いくら立派な掛け軸でも床の上の方に掛かっていては見映えも良くありません。そんな時は、自在を掛け軸に合わせて伸び縮みさせることで、より美しく床の間を飾ることが出来ます。小納はこの自在のような自由な働きこそ、随処に主と作るということでは無いかと思います。

人は誰しも生まれてくる境遇を選ぶこ

とは出来ません。ひよつとしたら自在もまた、床の間の主役になりたかったのかも知れません。しかし自在はその役割を果たしてこそ自在なのです。床の間の美も完成するのです。この時、掛け軸と自在はどちらが主客という区別は無く、それぞれがそれぞれの主体であり、お互いがお互いを引き立て合うのです。

「けしつぶうた ゴウ2」

まど・みちお

すばらしい ことが

あるもんだ

ゾウが

ゾウだったとは

ノミでは なかったとは